

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒065-8711 札幌市中央区大通西3丁目6北海道新聞社内

TEL 011-210-5802 FAX011-210-5826

「40校」達成を目指す

道内 実践校募集スタート

北海道NIE推進協議会(会長・山田家正北海道開拓記念館館長)は、05年度のNIE実践校の応募受け付けを12月から始めた。実践認定校に対する新聞の無償提供事業は来年度から実施内容が大きく変わる。これに伴い認定校数は本年度(計35校)より相当数の上積みが期待でき、同協議会は道内で「40校」達成を目指す。

新聞提供事業は全国の新聞各社と日本新聞教育文化財団(本部・横浜)が協力して進められ、北海道では1996年度か

ら本格的にスタート、05年度は実施から10年の節目となる。全国では本年度、当面の目標だった「実践校400校」を達成し、

来年度以降は100校増やして「500校」を目指すことになった。しかし、財政難などから現行制度のままでは目

標達成は難しい見通し。そこで最も資金負担が重いC型(実践教師6人以上、6カ月間提供)を廃止し、B型(同3人以上、4カ月間提供)、A型(同1〜2人、2カ月間提供)の2パターンに絞って500校達成のための資金を確保することにした。ただし、本年度新規実践校のうちC型の学校(道内13校)は認定期間が2年間のため来年度も6カ月間提供を保証する。500校のワクを各都道府県の小、中、高校総数に基づき配分すると、北海道の実践校の上限は32校となるが、必要に応じてさらに3校までワク拡大が認められる。これは別に同協議会は、学校現場の要望に応じて新

聞購読料を独自負担し「北海道ワク」を実施しており、本年度は計5校を認定した。実践希望が多ければ新年度も同程度を認める予定で、この結果最多で計40校が見込まれる。実践校の選定は教育行政機関や教育関係団体からの推薦、同協議会が各地で開いている「NIEセミナー」参加校、単独での希望校などを集約して3月下旬までに候補校を決める。正式には5月に第1次、7月に第2次に分け実践校が決まる。実践校には一般日刊紙6〜7紙を提供期間に応じた各販売店から配達するが、新規実践校の購読開始は原則として2学期以降となっている。

日本でNIEが開始されてから10数年、この運動は着実に教育実践現場に浸透し、各地でさまざまな実践が展開されています。教育の世界では、たとえどんな些細(ささい)なことでも、体系的で一貫した取り組みを行えば、それなりの成果を生み出すことができます。



道教育大函館校助教 阿部 二郎

新聞教材、冷静な選択を

いるようです。NIEは、「教育方法」としての価値があるのでしょいか、「教育内容」としての価値があるのでしょいか。それとも、両

容だとすれば、教育的価値があると判断された時にのみ用いることになりつます。そして共に「判断の妥当性」が厳しく問われなければなりません。

れることを探しながら、ひたすら試行実践する」という段階は過ぎ去りつつあるように思います。「新聞でもできる」から「新聞だからこそでき

委員会「2001年全国メディア接触・評価調査」における6つのメディアの項目別比較結果を見る限り、メディアとしての新聞の評価は必ずしも高いものばかりとはいえない。NIEの有効性を認めつつも、教材としての新聞に対する客観的で妥当性のある評価を下し、冷静に取捨選択する必要があるであろう。

今後のNIEの「質」を決定する「分水嶺」としての時期に至っているというのを自覚しながら、慎重な取り組みの中でNIEを実践し、その発展に寄与していきたいものです。

そして、どんな成果にも教育的意義や価値を見いだすことが可能です。しかし同時に、「なんでもあり」というある種の「無節操さ」をも生み出して

者の相乗的効果を期待すべきものなのではしよいか。「方法」であるなら、新聞を使うことが最善・最適であるという判断される時にのみ用いられよ、内

仮に相乗効果を狙うなら、方法としても内容としても最善・最適であるという組み合わせは決して多くはないはずで、すでに「NIEとしてや

る」に収束させるべき時期でしょう。教材としての新聞の評価は、メディアとしての新聞の評価と無縁ではありません。新聞協会広告

学習内容3割削減など学習指導要領が改定された際、学校側では「これでは学力低下間違いなし」と明言する向きが多かったが、「やっぱり」という言葉がいま飛び交っている。2000年の結果と比べ「読解力」「応用力」「思考力」「問題解決力」が軒並み低下している。読解力低下の背景にあるのは、携帯電話やメール通信がまんべんなく普及していること。短文や絵文字ばかりでは読む・書く力が育たないのも当然だ。読書習慣の欠落、そして自分の意見を述べたり書いたりする授業の不足も深刻だが、最大の理由は勉強時間の短さ。日本は週6・5時間(韓国12・7時間)に過ぎない。最新の教科書は写真やイラストが多いなど視覚に訴える編集傾向が強まっている。入試もマークシート化され、活字に触れ考えさせる時間の絶対量が少ない。NIEの需要度はますます強まるだろう。NIE学習の効果測定で、「生きた教材」である新聞を活用することで子供の学習意欲や積極性が高まるという顕著な効果が得られたからである。率先垂範、まず教師が新聞を読む習慣を身につけようではないか。(高)



学力低下論

OECD(経済協力開発機構)が公表した15歳の「国際学習到達度調査」結果に文科省は厳しい反応を示した。02年に授業時数・

同時に各紙を読める醍醐味

「簡単なりポートを作成すれば、新聞代を持ってくれば、新聞代を働いてくれるらしいぞ。同僚の社会科教師とそんな話をして、「10万円以上の新聞購読料が無料になる」という

特典ばかりを強調し、気楽に参加することに。したのが昨年度のことである。動機は完全に不純であった。新聞が届いて、いざ「実践しよう」と考えた。しかし、実践以上の問題が存在した。届く新聞の量が想像をはるかに超えていたのである。当然だ、

を待て、図書室で閲覧できる状態にしてもらった。NIEの良いところは、道内はもとより、全国のすぐれた先生方の実践や書物を新聞紙上で知ることができるところである。

6紙が毎日毎日(学校が休みの土日祝日にだっ)届く。特に休み明けの月曜日、私の卓上はすごいことになっていてその処理だが、図書室担当の先生のご協力

白糠町白糠中教諭 藤原

中でも、新聞スクラップを生徒たちに提唱し、長年実践されている先生のやり方を真似させていた。6紙を教室に持ち込み、比較読みをしな

ポーツ紙しか読まない生徒も必死に社説を読む姿を見るのができ、同時に複数紙を読めるメリッ

孝高

毎日経済欄を読む生徒が現れ、新聞が身近になったと伝えてくれた。「字が小さくテレビ欄がないけれど、株式情報は一番読みやすい」と日経新聞を絶賛する生徒も。目的別に編集された専門紙の威力を感じ取ったようだ。

シヨ

組んでいこううちに、購読期間が過ぎてしまった。購読中はときおり「じゃまくさい」と感じていた。毎日の新聞整理だったが、期間が過ぎてしまうと、なんだか寂しい。2年間の短い期間だったが、新聞という教材を使い新しい実践を行うことができ、すぐれた先生方の実践を真似させていた。非常に有意義な体験だった。

NIE実践校 奮闘記

貴重な「新聞のある環境」

月曜日の朝は憂うつだ。思わずため息が漏れる。金曜の夕刊から月曜の朝刊まで、4日分の新聞が積まれてい

に襲ってくる。実践以前の部分で結構へこたれてしまった。新聞は読まない限り、文字のある紙にすぎないのだ。ところが、NIEコー

読み手を求める本来の「新聞」に化身するのだ。見出しや写真だけでなく、同じ記事でも各紙の論調は違う。新聞社間の温度差を感じるの

これが普通だったことを思い出す。アテネ五輪。1面と最終面が切れ目無くつながり、全体を包み込む紙面もあった。「やる気」と「企み」を感じ。写真は粗かったけど

帯広柏葉高教諭 田口

耕平

常茶飯



新聞が「モノ」

紙。それをすべて仕分けし、NIE分は事務室のカウンターの上に。係り生徒が取りに来ることになっている。翌日に持ち越し

ナーに広げて並べられると、ちよいと変貌する。朝のテレビでやっている「1面チェック」そのものじゃないか。物理的な「紙」だったものが、開かれて並べられただけで、

ニュースというものが固定的でないことをひたすら実感する。1面が全面広告の紙面があったら「やっぱり商売だからね」と思いつつ、大昔は

そんなこんなで、もちろん生徒個々の興味や関心の持ち方に違いはあるだろう。でも、身近にすぐ手にでき、簡単に比較できる紙面があるということ



課題解決学習に力点

鹿追町で十勝新聞研究大会

第15回十勝新聞教育研究会(十勝新聞教育研究会主催)が11月22日、十勝管内鹿追町・鹿追中で開かれた。「学習意欲を喚起し、生きる力を育てる新聞教育」がテーマの2つの公開授業と新聞づくり講習会があり、教師ら約50人が活発に意見交換、NIEと学校新聞づくりの指導法や技術のすべてを吸収しようという

熱意に包まれたII写真II。公開授業は鹿追中の中村宏喜、佐々木隆徳両教諭がそれぞれ担当した。中村教諭は1年生の国語の授業。「情報を発信しよう」を主題にまず4文字熟語の意味と書き順を練習。次いで「環境」「福祉」「平和」など個人学習課題を定め、課題解決に向けて収集した新聞記事の横に自分の意見を書き込み、最後に題字をつけ新聞スクラップを完成させるという学習を展開した。

またその会社を選んだ理由、高値で売るにはどうすべきか、証券会社の役割などについて楽しみに話した。新聞づくりはパソコンソフトを活用した技術向上を狙いとした講習。題字づくり、見出しの付け方、写真の挿入などについて学び、ミニ新聞を作り上げて

校種超えNIE交流

札幌で全道研究大会開く

「生きる力と自ら考える力を培う新聞教育」をテーマとした北海道NIE研究会が、北海道新聞E研究会・北海道新聞教育研究大会が12月3日、札幌平岸中で開かれ、小、中2校の児童、生徒たちが参加した公開授業や実践発表などで交流を深めた。

北海道NIE推進協議会と北海道新聞教育研究会が共催し、札幌、帯広など各地の小、中、高校教師や報道関係者ら約1

公開授業から

北海道NIE研究大会では小、中学校二つの公開授業が披露された。それぞれの担当教師が練り上げた意欲的な授業が展開され、詰め掛けた観客の共感を得ていた。

「命の大切さ」を実感しよう

札幌・山の手南小 朝倉 一民教諭

教師たちの熱心な視線が注がれる中、6年2組一民教諭は、今年7月17日37人が参加した「命を学ぶ」の読売新聞に掲載された「一男女ともに日本人の平均寿命が伸びた」という記事を用意した。



朝倉教諭に質問をする子供たち

「このまま平均寿命は伸びていくかな?」という問いかけに、未来の日本を予想する活発な発言が相次いだ。「言バトル」が始まった。「ハイ、ハイ」と次々に手が挙がり、意見はぶつかり合った。「寿命は伸びていく」と答えたのは16人。その理由は「医学がもっと進歩して

00人が参加した。公開授業はいずれもNIE実践校である札幌・山の手南小の6年2組、平岸中の3年3組の子供たちを主役に活発な授業風景を繰り広げた。実践発表は札幌・百合が原小の菅原隆司教諭、道教育大附属札幌中の太田和幸教諭、後志管内共和町・共和高の松山美彦教諭がそれぞれNIE実践活動やその成

果について具体的に説明した。このなかで5年生担任の菅原教諭は「さわやか学習」と名付けた朝学習を取り上げた。新聞記事をじっくり読み、その中で友だちにぜひ知らせたい記事をひとつ選び、それを自分の言葉で説明できるように読解していく、などを通じて「子供たちが政治や社会、世界の状況に

目を向けるようになったことを実感する」と話した。太田教諭は3年生公民的分野「わたしたちの暮らしと経済」の授業で、生徒4人を1グループに新聞の株式欄を見て「模擬株式購入」をする、などの学習を進めた。その狙いについて「リアルタイムの記事に触れることで、分析力・予測力の育成を

図ることができると説明した。また松山教諭は国語の授業で、新聞の投書欄を活用する実践活動について報告した。大会ではさらに、今夏の全国高校野球大会の覇者、駒大苫小牧高を取材した北海道新聞運動部・渡辺徹也記者が「駒大苫小牧高 師弟の絆」と題して取材報告を行った。

いく、「平和な日本はこれからも続くから」など。対する「伸びない」と答えたのは21人。自殺者の増加、若者らの薬物依存、輸入作物に頼る日本の食の問題、などがその理由として上げられた。「みんなは長生きしたいかな」との問いかけには、多くの子がうなずいたが、「健康でなければ長生きしたくない」という悲観的な答えもあった。

朝倉教諭は、生命の多様性を伝える例として、動物園の記事も用意した。ユニークな展示などで入園者数が増えた旭山動物園(旭川市)に関する11月20日北海道新聞と10月6日読売新聞のニュースだ。多くの動物園は動物たちをオリに入れ飼育しているが、旭山動物園はそれぞれの生態の特徴を生かした飼育と展示が評判になっている。

「立ち止まって命と向き合ってみよう。軽い命も奪っていい命もないよ。命が輝いているニュースを新聞記事の中から見つけよう」と朝倉教諭の言葉に子供たちは深くうなずいていた。



鈴木教諭とワークシートに書き込む生徒たち

ナを捕食したりする。自衛のための漁民たちはトド撃ちはなくならない。半面、トドが激減しつつあるのも事実。保護か駆除かの議論が、世界自然遺産登録問題に影を落としている。授業で生徒たちはトドを駆除する立場と、保護を支持する一つの立場に立ち、自分

自然を守ることの難しさ

札幌・平岸中 鈴木 直教諭

世界自然遺産は地球上に154件(今年7月現在)。そして新たに加わる期待が高まっている。私たち道民の誇る「知床」。私たちがかけがえのない大自然とどのような関係を築いていたらよ

いのか。平岸中3年3組37人は、知床を素材に「地球環境を考える」授業に取り組んだ。鈴木教諭は、知床や世界自然遺産への理解を深めてもらうため、まずヒグマやエゾシカ、トド、

クロテンなどの写真を生徒たちに示した。これらの動物が数多く見られる知床の位置を地図で確認しながら、世界自然遺産への登録活動を進める一方で、これら貴重な動物たちの絶滅が危ぐされている現状を説明した。北海道はあふれるほど自然が豊か、と思いきや、自然の恵みを生徒たちの顔に驚きの表情が浮かんだ。

同教諭はさらに、毎日新聞の連載記事「世界遺産への道―海の獅子・トド(3月10、11、12日掲載)」のコピーを配った。北海道の自然が世界自然遺産に登録されるまでにはまだいろいろな問題があり、さまざまな人々の思いが絡み合う。

たとえば、「海のギャング」とも呼ばれるトドの漁業への被害額は毎年10億円以上に上るといわれる。トドは頭がよくてマダラなど高級魚を好み、そのために定置網を破ってサカ

持するか理由も含めワークシートに書き込んだ。集計は駆除支持派が13人。理由は「漁業への被害」が圧倒的だった。一方、保護派は23人。「動物あつての自然」との反応が多かったが、どちらの立場も理解できるけど……としたうえで、やむなく駆除を支持した生徒もいた。簡単には言うていくことの難しさを感じ取ったようだ。

札幌・日新小学校



「身近な環境」 どう守るか

今日も雪、どこまでも雪……。雪との長い付き合いが始まった12月。大人たちはもうんざりするところだが、子供は風の子、元気な子。校内はみんなの歓声が響き渡っていた。今回は、札幌・日新小学校(本間道子校長・児童数511人)の5年1組、上田繁成教諭が手がける雪の季節にふさわしい「環境を守る」というテーマの社会科授業を取材した。(北海道新聞NIEスタツフ・江本 麻貴)

「できることをやろう」

授業は積雪が残る1978年当時と、すっかり雪が消えてしまった1998年のヒマラヤ氷河の同じ場所の写真を比べ合い、地球環境に影響を及ぼしている問題について考えることから始まった。「地球にどんなことが起きている?」との上田教諭の問いかけに、子供たちから一斉に声が上がった。「地球温暖化だ」、「砂漠化です」、「オゾン層の破壊かな?」、そして「まるでデイ・アフター・トゥモローだ」と映画のタイトルになぞらえる子も。ヒマラヤ氷河はみんなには遠い世界のようなだ。



上田教諭と環境問題に取り組む子供たち

環境問題を身近に感じ取ってもらうため、上田教諭はさらに11月25日の北海道新聞に出た記事のコピーを配った。あるコンビニが店頭で、訪れる車の運転者にアイドリングストップ(停車時のエンジン停止)を呼びかける活動を進めている、という内容。そのうえで、なぜコンビニがアイドリング停止を呼びかけているのかを話していった。気楽に利用できるコンビニはさまざまな年齢層の人が来店し、短時間で買い物を済ませる客が多いせいだ。エンジンをかけっぱなしにする人もいるという。子供たちは話し合った結果、「アイドリイングストップによってガソリンが節約でき、付近の住民にとっても空気がきれいになると歓迎される」ということで意見がほぼまとまった。子供たちは身近な環境を守ることに決めた。自分たちでできることは何か、それを考え、少しずつ取り組んでいくことが大切なんだ」と確

認し合った。上田教諭は最後に、活用した新聞記事について「新聞は『生きた資料』であり『動く資料』でもある。世の中で起きていることと、私たちの生活をつなぐ役目を新聞は果たしてくれている」とみんなに語りかけた。

意欲的に実践報告

旭川でNIEセミナー

4回目となる「NIEセミナー旭川」(北海道NIE推進協議会主催)が12月11日、北海道新聞旭川支社で開かれ、NIE実践校の教師ら3人が実践報告を行い、活発に交流した。旭川、留萌、深川などから教師ら25人が参加。まず、日本新聞教育文化財団が本年度新設した「NIEアドバイザー」の1人、小林直樹(旭川市東陽中教諭)がNIEへの取り組みについて「ムリせず少しずつ進めていくこと、そして仲間づくりが大事」と提言。同じくアドバイザーの毛利慎晴(士別商業高教諭)は「新聞の人生相談欄など、子供たちが興味を持ち、社会への関心を広げていけるような素材を見つけ、活用してほしい」と指摘した。

実践報告したのは三好ゆりえ(留萌市港南中教諭)、山野照人(旭川聾学校中教諭)、中澤耕太(旭川実業高教諭)、三好教諭は2年生社会の授業で台風18号に関する新聞記事を利用し、リポートをまとめた。文章を読み、内容を頭で理解し、それについて自分はどう感



「第3回NIEセミナー」が11月6日、北海道新聞釧路支社で開かれた。NIEアドバイザーの毛利慎晴(士別商業高教諭)が新聞教材の効果的な利用法などについて提言。4人の教師が実践報告した。釧路、根室管内の教師ら25人が参加した。毛利教諭は新聞の人生相談欄を使ったNIE授業などの活動を紹介し、「生徒たちに相談内容について回答させること、みんな当事者意識を持って、みんなで答えは的を得ており、時には感動を呼ぶ。この活動を通じて社会への目が開かれ、コメント力もつく」と強調した。実践報告をしたのは中原英雄(釧路市旭取小教諭)、伊藤高鋭(同市北中教諭)、月岡佑至(標茶高教諭)、沖野高志(根室高教諭)。この中で伊藤教諭は「みらい君の広場」への投稿を目的にした作文活動について報告し「本年度は2年生4人、3年生1人が掲載され、子供たちへの大きな励みになった。ともかくまずは書かせることが重要」と語った。また、月岡教諭

釧路でも4教諭が報告

現代社会を客観的に見る力を養う「学習や、興味のある時事問題の記事に関するリポート作成など」について説明。「まだ手探りだが、分析を通じて効果的なカリキュラムや授業案を作っていく」と意欲を語った。

は農業経営の授業に新聞は不可欠との判断から、農業関係の記事を探し、将来の経営について考えさせた。「農業に関する新聞記事が少ないのに気付いた。影響力のあるメディアによって農業を活性化させていくことが大切」という。

編集後記

世をあげて「禁煙、嫌煙」の大合唱。札幌市内の小中学校も今年から「校舎敷地内は全面禁煙」となりました。道浅井学園大(江別市)は昨年、学生が校内の指定場所で吸ったら1週間以上の自宅謹慎を命じる規則を定めています。札幌では路上でのポイ捨て禁止の条例も来年から施行される。